

銅鐸を製造した 土製鑄型の外枠

弥生時代には、米作りとともにさまざまな新しい技術や物が大陸から伝来しました。金属器を手にしたのもこの時代でした。青銅器の製作は、金属に対する化学的な専門知識や豊富な経験が必要とし、なかでも中空の銅鐸どうたくづくりは弥生時代の最も高度な技術でした。

銅鐸の鑄造は、同じ形の鑄型いがたを合わせ、その内部に銅鐸の厚み分を削った土製の中型なかじを据え、青銅（銅と錫すずの合金）に鉛を加えたものを流し込みます。鑄型には、石製と今回紹介する土製鑄型の外枠があります。この土製鑄型の外枠は、土器と同じように粘土を野焼きした丸瓦状のもので、外側には、石製鑄型と同じように把手とが作り出され、また、下端には2つの鑄型を正確に合わせるための目印が付けられています。本品は、形状や大きさが石製鑄型と共通する部分があることから、銅鐸の鑄型外枠として推定できます。本

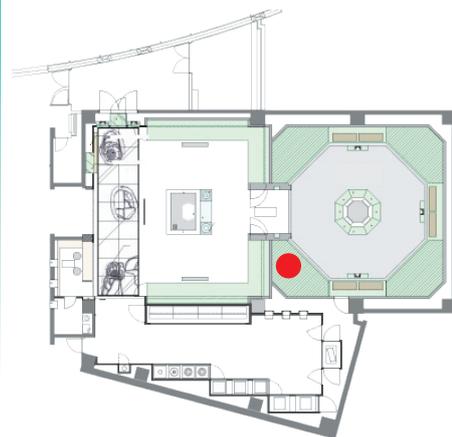
来は、内側に真土まねと呼ばれる細かな粘土を3センチほど貼りつけ、文様を刻み、鑄型としたものですが、真土は鑄造後に剥はがれ落ちたようです。そのため鑄造された銅鐸は特定できませんが、外枠の大きさから33センチほどであったことが分かります。

石製鑄型は、丈夫で6回前後も使えますが、青銅を流し込んだ時に発生するガスを逃がすのが難しく、失敗する確率が高い鑄型です。また、最適な石材の入手や大きさには限界があります。これに対して土製鑄型は、前述した石製鑄型の欠点がないので優れています。特に銅鐸が大型化する弥生時代後期以降に土製鑄型へと移行しました。今回紹介した土製鑄型の外枠は、まさに鑄型が石製から土製へと変革する時期のもので、銅鐸鑄造の技術的な転換を考えるうえで、重要な意義を持っています。



●コレクション・データ

時代 弥生時代後期
調査 唐古・鍵遺跡第3次調査
発見年 1977年
大きさ 高さ40.7cm、幅26.3cm
展示位置 第2室 「青銅器をつくる」



ミュージアム上面図と展示位置